

原子力

企業

前例は、自分でつくるもの

小林容子 (原子力規制委員会 原子力規制庁 技術基盤課 安全研究推進室)

仕事の内容とやりがい

最初に就職したメーカーでは、1つの領域でスペシャリスト的に歩んでいきたいと思ったのですが、家庭の都合で、実際には、メーカー→独立系SI企業→原子力系エンジニアリング会社→研究所出向→ユーザー系IT企業と何回も転職しました。最初の思いとは全く異なった道のりを歩んできましたが、多様な組織を経験してきたことは、今となっては、むしろ私の財産となっています。仕事の内容は一貫して原子力分野ですが、中身はプラント制御、熱流動、構造解析、炉心管理、最適化……というように、非常に多岐にわたっています。特に、先端領域の技術開発や研究開発を多く手がけてきました。誰もやっていない領域の開発は、最初はなかなか周囲の認知を受けられなく苦労も多いのですが、最終的にやり遂げたときの達成感は、苦労した以上のものが得られます。私の性には、そういうのが合っているようです。

仕事と家庭とのバランス

2人の息子は、今はもう成人しましたが、生まれた当時は、育児休暇制度も短時間勤務制度もない時代で、産休明けからすぐ保育園に預けました。同じ保育園に入れなかったのも、毎日、2件の保育園の送り迎えをしていました。仕事と家庭のバランスというより、ただ、ひたすら「がんばった」という感じです。働きやすい環境の整備も大事ですが、ただ、ひたすら「がんばった」という経験は、後の人生の中で、非常に大きな財産となっています。

進路決定のきっかけ

高校までは、国語や社会も好きだったので、なぜか理系に進みました。何か大きな目標があってそれに進むのもいいですが、何となく進んで、それが良かったという場合もあります。私の場合は後者でした。学部ときは早く実務をやりたいだったので、メーカーに就職しましたが、20年間、実務をやって、今後、原子力分野では最適化の専門知識が必要になると思い、博士課程に入学しました。専門的に高度な研究をしたいと思ったので、社会人コースではなく、正規の博士課程を選択しました。会社に席を置きつつ、週に1回通う第2の学生生活は、時間的には大変でしたが、非常に貴重な体験でした。

進路選択に対するメッセージ

進路選択だけでなく、その後の技術職においても、「前例がない」と周囲から言われることが多々あると思います。実際に私もそうでした。今では、「前例がない」といわれたら、「私が前例をつくります」と答えることにしています。要するに、「前例がない」ということで、やりたいことをあきらめるとのことです。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

解析コードやシステムの開発を行なう共同研究に携わっていたため、海外の研究所や企業に滞在していたことがあります。欧米人の仕事観や仕事の進め方を自分の目で確かめることができ、また、日本という国を客観的に見つめなおすことができ、その後の自分自身の仕事への取り組みやライフワークにおいて、大変参考になりました。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

海外の女性は、日本人の女性研究者と比較して、数段アグレッシブでした。小さい子供がいても、躊躇なく海外に職を求めるなど、活動の範囲がグローバルです。女性の活用が進んでいるという社会環境の違いも大きいように思いました。しかし、よく話を聞いてみると、最初からそういう環境であったわけではなく、自らの努力の結果であるとはっきり主張している人が多いことが非常に印象的でした。

滞在先の思い出・生活者としての体験

ヨーロッパの国際会議に出席したときに、バンケットで同じテーブルになったヨーロッパの研究者から、日本人はもっと自信を持った方が良いといわれました。海外の人から見ると、日本人は自信がないように映るのでしょうか。確かに、思い当たる節もありますが、発対面に人にも、臆せずにそういうと言えることがすばらしいと思いました。

<小林容子 (こばやしゆうこ) プロフィール>

都立千歳高校 → 慶應義塾大学理工学部計測工学科 → (株)東芝 → (株)東洋情報システム (現TIS) → ニュークリア・データ(株) (途中:日本原子力研究所出向、第1子出産、第2子出産) → (株)テプコシステムズ (途中:慶應義塾大学理工学部理工学研究科博士課程、博士(工学)取得) → 現在

